

# 営農情報

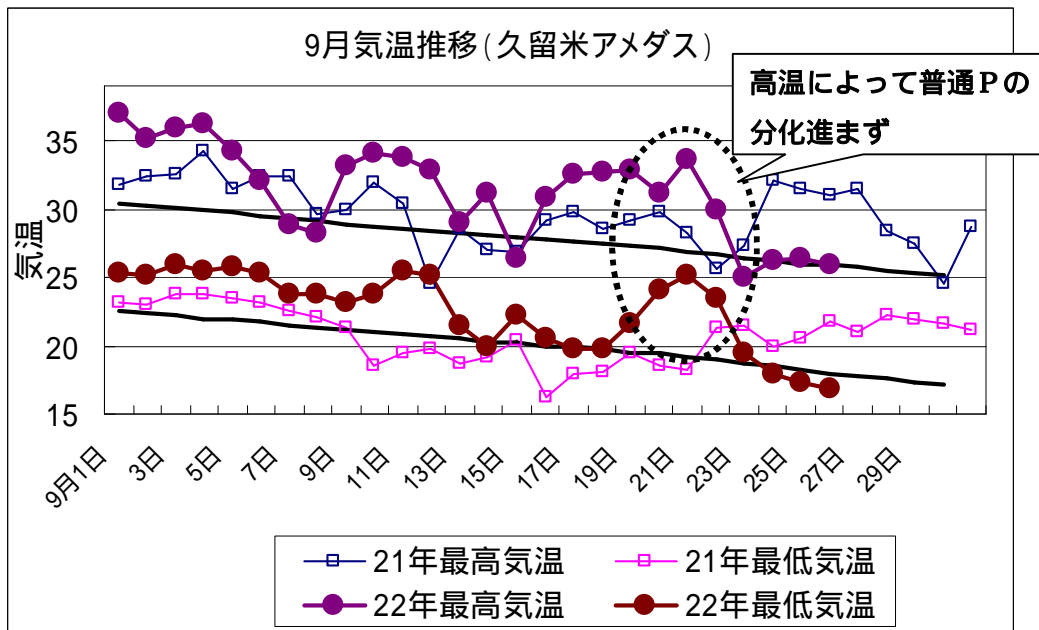
第94号平成22年10月1日発行（イチゴ）

## 花芽分化期の生育経過

育苗期の高気温の影響により株冷の花芽分化は昨年に比べ遅れる傾向であった。また夜冷では日中の高温の影響と考えられる花芽分化遅れの傾向があった。

型の定植はほぼ計画通りに行われたが、型は花芽分化が遅れ気味となり定植を遅らせた。

普通ポットは、9月下旬から肥効初期が見られ花芽分化の兆しがあったが、9月24日時点でも未分化株があるなど分化ステージが揃っていなかった。普通ポットの花芽分化日は昨年（9/20頃分化）に比べ5日以上遅くなったと考えられる。



## 10月の栽培管理目標

九州北部地方（山口県を含む）1か月予報（9月25日から10月24日までの天候見通し）

平成22年9月24日 福岡管区气象台 発表

### < 予想される向こう1か月の天候 >

天気は、数日の周期で変わると見られる。向こう1か月の平均気温は、高い確率が50%です。

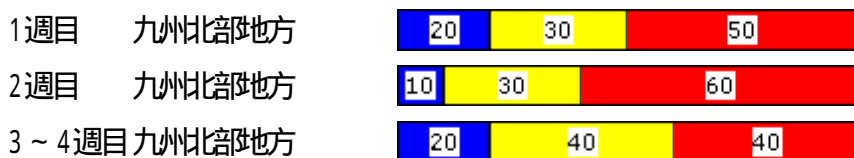
週別の気温は、1週目は、高い確率が50%です。2週目は、高い確率が60%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

- < 予報の対象期間 >
- 1週目 : 9月25日(土)～10月1日(金)
  - 2週目 : 10月2日(土)～10月8日(金)
  - 3～4週目 : 10月9日(土)～10月22日(金)

### < 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%) >

項目	20	30	50
【気温】九州北部地方	20	30	50
【降水量】九州北部地方	30	40	30
【日照時間】九州北部地方	30	40	30

< 気温経過の各階級の確率 (%) >



凡例: ■ 低い ■ 平年並 ■ 高い

以上のように、気象予報によると、10月はやや高温気味に推移すると予想されていることから、昨年ほどの2番果房の分化時期の前進化は予想できない。

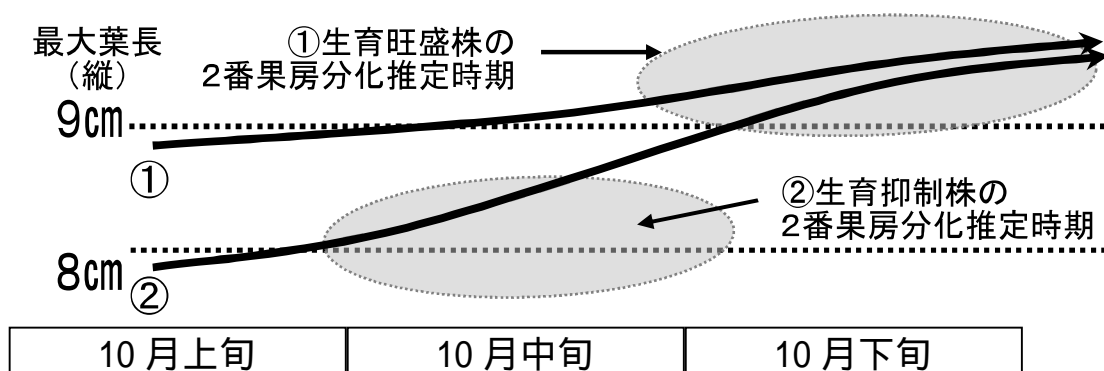
早期作型ほど生育は軟弱、旺盛となりやすく、また普通ポットは定植日が遅かったため生育が遅れ気味になりやすい。

早期作型では1～2番果房間の開き、普通ポットでは定植後の生育遅れ、が懸念されることに留意しながら管理する。

2番果房は、体内窒素濃度が高くなると花芽分化は誘導されにくくなるので、10月上旬の株(葉)の大きさを目安として、2番果房安定に向けた管理が必要となる。



時期別、最大葉長の推移



の生育旺盛株の場合 (最大葉の縦長が8 cm以上の株)

2番果房の分化が遅れる傾向にあり、分化の安定が図られるまではこれ以上に生育旺盛とならないようにする。(例: かん水制限、追肥を控える、マルチ・ビニル被覆を遅らせる等)

の生育抑制株の場合 (最大葉の縦長が8 cm以下の株)

2番果房の分化が比較的早期に行われるため、分化確認後は早急に株の生育促進を図り、厳寒期に向けての株作りを行う。(例: 追肥の施用、マルチ・ビニル被覆を早める等)

## 今後の管理について

### 特に早期作型において

#### かん水制限による生育抑制

10月上旬で、最大葉(縦)が8 cm程度の生育を目安

早期作型では、2番果房早期分化対策として、活着後に徐々にかん水量を控え、生育抑制を図る。

特に、早期作型での2番果房分化促進のための寒冷紗7被覆下では、土壌水分が乾燥しにくくなるので、かん水を控える。

#### 寒冷紗被覆による2番果房分化促進

早期作型では、2番果房早期分化対策として、昼間の高温を下げるため、9月25日頃から10月20日(花芽分化確認)まで寒冷紗を被覆する。なお、10月上中旬に曇天が続くようであれば除去する。

なお、25日間の長期間の被覆は、遮光率や天候により、軟弱徒長となる場合がある。

厚手(遮光率60%程度)の寒冷紗は、10日間程度を目安とし、曇天が続き、株弱りが見える場合は寒冷紗を取り去る。

寒冷紗の例	遮光率
シルバー寒冷紗 109 番	39%程度
黒寒冷紗 600 番	51%程度
黒寒冷紗 610 番	58%程度

#### ミツバチ搬入

- ミツバチは、頂花開花前より準備しておく。
- 巣箱は、ハウス外に設置するのが好ましいが、寒冷紗被覆ハウスにミツバチを搬入する場合は、訪花を促すため寒冷紗の下に入れておく。

#### 下葉除去・脇芽除去

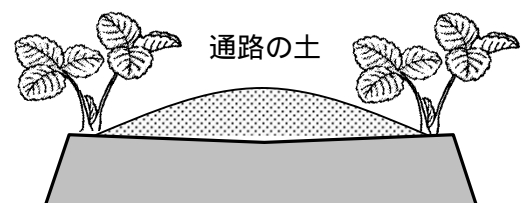
- マルチ直前に下葉とどろ芽の除去を行い、マルチ時に葉数が4～5枚程度になるようにする。その後、下葉は収穫期までは黄化した葉のみ除去し葉数を確保する。
- 摘葉直後は、必ず「炭そ病」「ダニ」の防除を徹底する。

#### マルチ前の追肥

- 早期作型において2番果房早期分化対策として、生育旺盛(10月上旬で最大葉8 cm以上)で2番果房が分化していない場合は、マルチ前の追肥は控える。
- 2番果房が分化した後は、「新生イチゴ」を80 kg / 10 a 施用する。

#### 中耕・うね上げ

- マルチ前や追肥施用後は、必ず中耕を行い、根張りを促進させる。また、同時に通路をさらえ、うね上を平らに整地する。
- 定植遅れや活着不良等で、生育が悪い場合は、液肥や葉面散布で生育促進を図る。



#### かん水チューブ設置

- かん水チューブの設置は、うね中央部に固定し、マルチ前には散水状態を確認しておく。

## マルチ張り

早期作型では2番果房早期分化対策として、マルチ張りは出蕾直前まで遅くする。

また、マルチの裾は2番果房分化確認後まで肩まで上げておく。

なお、生育不良の場合は、早めのマルチにより生育促進を図る。

- マルチを張った後は、十分にかん水を行い、「炭そ病」、「ダニ」の防除を徹底する。

## ビニル被覆

- ビニル被覆は、平均気温17度を下回る頃を目安とする。早期作型は開花直前にするが、晴天が続くならばできる限り遅く被覆する。

生育不良の場合は早めに行う。

- ビニル被覆後は、高温になりやすいので、できるだけ低温管理(サイド・つま面の開放)を行う。夜間温度が10を下回るようになったら、ハウスの閉め込みを行う。
- 株が小さく生育が遅れている場合は、早期より高めの温度管理で生育促進を図る。
- 「うどんこ病」の発生がある場合は低温管理とし、発生拡大を防止する。

## ジベレリン処理

- 1番果房出蕾期に10ppmで5cc/株の処理を行う。(ビニル被覆・かん水後が効果的)

## 果実マット設置

- 果実マットは頂果の開花期頃までに敷き、風で飛ばされないよう抑えをしておく。

病害虫防除 防除暦(平成22年4月連絡協議会作成情報および生産委員情報)を参照に防除を徹底する。

うどんこ病：定植後の軟弱徒長が発生を助長する。17～20で発病が見られるようになり、ビニルを被覆すると湿度が高く軟弱徒長傾向で発病拡大しやすくなる。

葉の裏に薬液が付着しやすくなる葉かぎ後の防除が効果的で、ビニル被覆後までの定期的な予防散布を徹底する。

炭そ病：定植後は、株に傷がつかないように、下葉の除去作業はマルチ直前の1回のみとする。定植後は定期的な防除を実施し、降雨・下葉の除去作業の前後の防除を徹底する。

オオタバコガ：9月中旬から発生し初めている。早期作型で被害が激しい。

オオタバコガは、新芽や蕾に、卵をひとつずつ産み付け、ふ化した幼虫が新芽や蕾、果実の中に潜る。そのため、発生初期の防除を徹底する。

ハスモンヨトウ：葉裏・ハウスパイプ等に産み付けている卵塊の除去や発生初期の若齢幼虫時(1cm程度)の薬剤防除が重要となる。

ハダニ アブラムシ類：今年は、育苗時から発生が多かった。

下葉除去後、マルチ被覆前後に、薬液が葉の裏にかかるように防除する。

「チリカブリダニ」を使用する場合は、早めに使用計画を立て、影響がない農薬を使用する。

スリップス：開花中の花に飛来し、産卵し幼虫が果実に被害をあたえるので、10月上旬の初期防除を徹底する。特に早期作型では発生が多くなるので注意する。

1 散布前は必ず農薬ラベルの確認と飛散防止の徹底!

2 散布後は必ず散布器具(タンク等)の洗浄と防除履歴の記帳!